私の心の中は血の涙が流れていた。親にも言えない心の苦痛を、一人で黙って胸にしまっておかなければならず、朝鮮女性は若いころは吸わないタバコも吸うようになり、おかしな性格の人間になってしまった。私とて、どうして夫に愛され、子どもを産み、幸せな暮らしをしたくないだろうか。私が一生のうちで一番うらやましかったのは、日曜日や祝日に子どもや孫を連れて幸せそうに過ごす人たちの姿だった。

日帝（の植民地）でなければ、私もあのような和やかや家族を持ち、幸せに暮らすことができたであろう、そう考えると声を上げて全身を震わせて慟哭したい気持ちだ。しかし日本はいまだに私たち被害者を侮辱し、正しく謝罪し補償をしていない。私は日本政府に、万が一日本人女性がこのような仕打ちを受けたとしたら、どうするかと聞きたい。

日本政府は日本軍性奴隷問題を解決せずには、決してこのまま済まされないだろう。

（出典：朝鮮　日本軍「慰安婦」・強制連行被害者補償対策委員会）

6 広東、香港、シンガポール、インドネシアを転々として

——金福童（キムボットン）——

●酒でも多量に飲めば死ぬと聞き、コーリャン酒を分け合って飲んだ

私は一九二六年五月一日、慶尚北道（キョンサンブック）の梁山（ヤンサン）で生まれました。家には娘ばかり六人いましたが、私はそのうちの四女でした。幼い頃、家の暮らしはかなりいいほうでした。土地を多く持っていたので、私の家で小作料を払い土地を借りていた人も少なくなかったのです。ところが、父は他人の保証人になってパンクして、土地は一つまた一つ他人の手に渡ってゆきました。このことでショックをうけた父は長い間寝込むようになりました。父が寝ているのに、金貸したちは家に押しかけ、借金を返済しなければ警察所にぶちこんでやる、と脅迫するのでした。祖母と母は恐ろしくなり、少しばかり残ってい

1926年慶尚北道に６人姉妹の４女として生まれる。家庭は比較的裕福だったが土地を失い父が亡くなり無一文になったが、母に育てられる。学校には４年まで通ったがやめた。1941年に区長と班長により「テイシンタイ（挺身隊）」に行けと脅迫をうけ、台湾を経て広東、シンガポール、マレー半島、インドネシア等の南方地域の慰安所を転々とした。シンガポールで日本敗戦を迎えるが、日本軍に連行され第10陸軍病院で看護訓練を受ける。米軍収容所を経て船で帰国。

た土地の書類に印を押してしまいました。間もなく父は亡くなり、女ばかりになった家族が無一文で残されたのでした。幸い母が女丈夫でしたから、歯をくいしばり肥桶まで担いで私たち六人を育てるために頑張りました。

●挺身隊（テイシンタイ）に行けと言われ

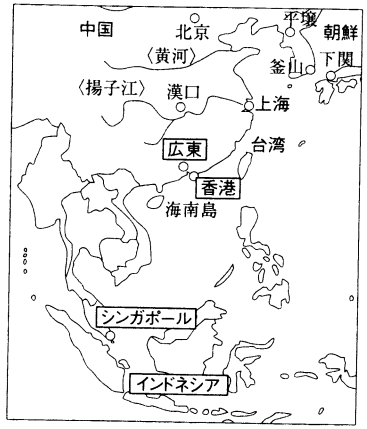
私は梁山の初等学校[*1]を四年まで通うと辞めてしまって家にいました。母がぶっそうなご時勢だから外に出ず家にいるのが良いだろうと言っていたからです。通学していた学校は、朝鮮人の生徒ばかりいて、先生のほとんどが朝鮮人でした。ちょうど私が一六歳になった年の一九四一年でした。姉さんたちは、日本人の奴らに連れて行かれないようにみんな嫁に出しました。私はまだ幼い年なので心配ないだろうと、家事を手伝っていました。

ある日、区長と班長が、階級章のない黄色っぽい服の日本人と一緒に家に訪ねて来ました。チマ・チョゴリを着ていたのから察すると、春か秋だったと思われます。その当時、区長といえば近頃の道知事よりも敬われていたようです。一緒に来た日本人は韓国語がとても上手でした。彼らは母に「テイシンタイ（挺身隊）に娘を送るので出しなさい」と言いました。「息子がいなければ、娘をお国のために送らなくちゃね？　それも嫌なら奥さんは反逆者になるから、ここでは暮らせませんよ」とも言います。母が「テイシンタイっていうのは何ですか？」と訊ねると、「軍服をつくる工場に行き働くことです。三年だけ働けばいいし、その前でも嫁にゆくことになれば、故郷にそう連絡すれば、帰れるのだから安心して行かせなさい。三年過ぎてもまだお金が稼ぎたければ、それからも働けばいいのです」と彼らは答えました。記憶ははっきりしませんが、その人たちは母に何やら書類に印を押すようにと言い、母は、父が早まって印を押したために経験した悪夢が蘇って、とても押すわけにはいかない、と大声で喚（わめ）いていた姿が目に浮かびます。私は行く外しかたがなかったのです。結局、そうして連れて行かれました。

その日本人は私をバスに乗せると釜山まで連れて行きました。そして埠頭にあった倉庫に押し込めました。倉庫の前には軍人が銃を持ち歩哨に立っていました。すでに二〇人くらいの朝鮮人少女たちが来ていました。大邱（テグ）、晋州（チンジュ）、金海（キメ）、宜寧（ウィニョン）から連れて来られた娘たちでした。私より年上がほとんどでしたが、みんな結婚前でした。そこでは父母が朝鮮人だけれど、日本で長く暮らしたという四〇歳くらいの男が私たちを見張ったり、通訳をしていました。彼が他の娘たちを連れて来たようです。夜、船にのろうと言われて埠頭に出てみると、一般の乗客もいる連絡船が来ました。その船にのり一晩中航海して、朝、下関に到着しました。釜山で乗船した時から、私を連行した日本人と釜山で私たちを見張っていた朝鮮人の男が引率しました。下関では市内にも入れず、私たちは埠頭の倉庫らしい場所に入れられたまま、約一週間留まっていました。倉庫に閉じこめられたまま、外に出られずご飯も倉庫の中で食べます。朝鮮人の男が見張り、日本人の男が缶にご飯とおかずを入れてくれました。

一週間が過ぎた頃、下関から貨物船に乗ることになりました。軍人たちはその船に山のような荷を

＊1　植民地期朝鮮の朝鮮人児童の初等教育機関は普通学校（～一九三七年）、小学校（一九三八年～）、国民学校（一九四一年～）と呼ばれ、日本人児童とは別学であった。義務教育制のなかった朝鮮では、朝鮮人の場合、学齢期（七歳）を過ぎてから通学する例も少なくなかった。



積み込みました。私たちは階段をしばらく降りた船の底に座りました。船の中は荷ばかりで、人間といえば私たちを除けば、船を運航する軍人とその他数人の軍人がのっているだけです。どれほど進んだのか何もわかりません。乗っていたのは船底だったから、空気が濁ってひどい船酔いに苦しみました。

着いたというので下船すると、台湾だと言われました。船から降りて、細い道をかなり長い間歩き、農場らしいところに着きました。トウモロコシとバナナの木がたくさん繁った場所に家がありました。私服の人たちが私たちを見張りました。日本の警察官だとのことです。台湾では、米とおかずにする材料を渡され、自分たちで炊いて食べるように言われて、交替でご飯の支度をしました。そこで、一カ月あまり過ごしました。彼らは私たちに軍服をつくる工場に行く途中だと説明したため、まだ工場が決まらないのだろうと思っていました。けれども本当は、船の到着を待っていたのだろうと思います。

始終どこかへ連絡していたようでしたが、ある夜船が来たと言いました。乗船する前に、私たちは衿がついていて、モンペのズボンになった国防色の軍服に着替えさせられました。それから故郷に手紙を出すようにと言われたのです。

彼らが読みあげる通りに書きました。恐らく字を知っている人だけが書いたのでしょうが、誰が書

いたのかはわかりません。「無事に暮らしています。元気ですから心配しないでください。また書きますので返事は要りません。身体に気をつけて元気でいてください」。こんな内容でした。私たちは手紙の検閲をうけ、写真をとった後、その写真をもらって手紙に入れました。手紙の封筒には発信地の住所もなく、それぞれ家の住所だけを書いて送ることにしました。

母はこの手紙を読むと、私が台湾に連れて行かれたのだと考え、嘆き悲しみながら歳月をおくったといいます。

●広東で「慰安婦」にされ

ある日の午後、私たちは船に乗ることになりました。釜山から引率してきた日本人の男と朝鮮人の男が、引き続き私たちを連れて行きました。下関から台湾に行った時とおなじく貨物船の船底にのりました。軍人は数人だけで、船には荷がいっぱいでした。船は広東に到着しました。

広東[*2]で降りて、幌の破れた軍のトラックにのって衛生病院らしいところに行きました。引率していた日本人と朝鮮人は私たちを上司のところに連れて行きました。その人は赤い階級章のついた軍服を着て、長い刀を立てかけて腰掛けていました。連れて行った人たちがその人に書類を出しました。彼らは私たちに、上司が質問をしたら、ただ「はい、はい」とだけ答えるよう教えていました。私たちは一人ずつ、ある部屋に入るようその人に指示されました。部屋では三〇歳くらいの日本人軍医から検査[*3]を受けました。軍医は私に、腰から下は全部ぬいで板の上にのぼり、脚を開くようにと言いました。生まれてから一度もよその男の前で服をぬいだことがなかった私は、すっかり驚き恐ろしくなり

ました。何が何やらさっぱりわかりません。最近の子どもだったら知り尽くしていることでも、その当時の一五、六歳の少女たちは何も知らないことのほうが普通でした。私は板の上にのぼるまいと足をばたつかせました。軍医は無理矢理服をぬがせると、股間を検査しました。

私たちは全員検査が終わると、かなり歩いて一軒の建物に行きました。そここそが、悪夢のような歳月が始められた慰安所でした。鉄道がそばにありましたが、民家からはすこし遠く木が多いところでした。慰安所の前にも他の家々がありました。高い建物がありましたが、みんな空き家でした。私たち二〇人が慰安所に着いた時、すでに一〇人がいたので、全部で三〇人が一緒だったことになります。中国人の女が一人いただけで、あとはみな朝鮮人の女でした。

建物の真ん中に廊下があり、その両側に部屋がずらりとあります。部屋は三〇ばかりだったでしょうか。それぞれ一つずつの部屋に配置され入りました。各部屋には番号がついていて、その下に慰安婦の名前が貼ってありました。部屋と部屋の間は合板で仕切られ、となりの部屋からは息遣いまで聞こえました。となりの部屋でおこる悲鳴はもちろん、あらゆる音が聞こえました。部屋はとても狭く、セメント床に木を組んでつくったベッドが一台あるだけです。慰安所内にはシャワーを使えるところもあり、生活はすべて慰安所の建物内でなされます。外には出られません。私たちを連れて行った日本人と朝鮮人の男たちが私服で、門の前で監視しています。どうしても外出しなくてはならない時は、軍人の監視つきで出かけました。

軍医から検査をうけたその前夜、部屋で休んでいると、昼間私たちを検査したその軍医が私の部屋に入って来たのです。彼が近づくと、私は彼が恐くて裏庭に逃げ出し茂みに隠れました。軍医は追っ

て来ると、私の両頬を思いっきりなぐりました。しばらくなぐられると、顔全体に感覚がなくなるほどになりました。彼は命令に従うほうが身のためだと言うのでした。従うより他ありませんでした。反抗しても自分だけ損をするのだから、されるままになっていようと心に決めました。でも、そんなことは初めての経験で、ふるえてしまって堪えられなかった。血が出て裂けたように痛かったです。腫れあがりました。ひりひり痛くて、しばらくはオシッコも出来ませんでした。

その翌日、部屋から出てみると、女たちはそれぞれ同じ目にあい、血で汚れたものを洗っていました。洗濯物をベランダに並べながら、私と他の女二人は一緒に死のうと話し合いました。私たち三人は慰安所の清掃をしてくれる中国人の男に身振り手振りで、飲んで死ぬ真似をしながら、そんな薬が欲しいと伝えました。家を出てくる時、母が非常時用にくれたお金一円をその中国人に渡しました。一円は、当時としては大金でした。母はお金をくれながら、お金がなくなれば家に連絡しなさいと言いました。そのお金で死ぬための薬を買うのだと思うとやりきれない気がしました。しばらくすると中国人は何かが詰められた壜を手渡してくれながら、バケツに水を汲んで一緒にくれました。二つを同時に飲めという意味でした。壜の中身を口にふくむと、焼けつくようで堪えられません。それは毒薬ではなく、コーリャン酒でした。誰かが「酒だよ。酒でも多量に飲めば死ぬんだってさ。飲んでためし

＊2　広東の日本軍慰安所は、一九三八年一〇月に広東を占領した第二一軍が創設した。詳しくは朴西年さんの項を参照。金さんが広東に来た一九四一年には第二三軍になっていた。

＊3　性病検査のこと。女性たちは慰安所に着くと例外なく軍医などによる性病検査を受けさせられた。日本軍将兵への性病罹患（による兵力低下）を警戒してのことである。

てみよう」私たちはそのコーリャン酒を分け合って飲みました。喉が飛び出しそうです。水を飲んで少し治まるとまた飲みだします。飲みつづけると、喉も麻痺してしまったのか、痛みも感じなくなり、一壜を空にしました。そしてそのまま伸びてしまったのでした。慰安所では女が三人いなくなったと大騒ぎだったようです。ベランダに洗濯物を干しにきた女が私たちを発見し、軍人に報せたそうです。衛生兵が来て、ホースで私たちの胃の中を洗浄しました。酒で朦朧とした私たちは四日間、意識不明の状態でようやく目をさましました。目がさめると、私たちは病院でリンゲル注射を打たれていました。頭は割れそうに痛く、内臓が飛び出しそうで、食事どころではありません。こんな状態が三カ月つづきました。その時、内臓をやられてしまったため、今でも消化がうまくいかないのです。

食事と掃除は中国人がします。食堂が別にあり、ご飯をたくさん炊いておいて、それぞれ時間がある時に行って食べます。何かで遅くなると、飯がなくなり食べられないこともありました。慰安所は軍隊の外側にありますが、慰安所に入れるのは日本の軍人だけです。軍人たちは慰安所に入る時は門前で管理人に何かの証明書を提示して、代わりに票とサック[*4]をもらって部屋に入りました。その度に管理人は帳簿に何やら記載していました。私たちは票を集めておき、夜、管理人に持って行きます。すると彼は記録をとります。管理人は私たちを釜山から引率してきた韓国人でした。彼は日本の軍服を着て、階級章はつけていません。票は黄色っぽくて、硬い花札の四分の一ほどの大きさの紙切れでした。それだけでした。お金をもらうことすらわかりませんでした。ただご飯を食べさせてもらい、時々服が入り用になれば買い与えられ、化粧品もそうして買ってくれました。服は「簡単服」という短い丈のものを主に渡され、下着ももらいました。管理人は戦争が終わればお金をあげると言っていました。あんな大きな家が買えるくらい充分なお金をあげよう、と言いながら、外に見える大きな建物を指差したのです。たまに慰問品をわけてくれたこともあります。

普段はそれほど人は多くはなく、日に一五人くらいでしたが、週末には数えきれないくらい多く来ました。五〇人は超えていたと思います。土曜日には、昼の一二時から午後五時まで、日曜は朝八時から午後五時まで、兵士がやって来ました。五時が過ぎると、憲兵が現れて調べるので、兵士たちは残ってはいられません。夜の七時が過ぎると、将校がやって来ます。泊まって帰る人もたくさんいました。性器が腫れてうまく挿入できないと、軍人たちはサックに軟膏を塗って挿入しました。

性病検査は一週間ごとに定期的におこなわれました。軍医が宿舎にやって来て、つくった寝板の上でおこないます。六〇六号注射は、性病があるなしを問わず、月に何回か打ってくれました。[*5] この注射を打つと血がきれいになると言われました。ところが、注射の後、鼻から変な臭いがして頭がくらくらしました。性器が腫れたり痛くなると、軍医が治療して良くなるまでの数日間は軍人の相手をすることを禁じられました。部屋の奥の方に戸があって、後ろから出ると下から水が流れるようになっており、そこから赤い消毒水が出ます。何度もそれをもらって下部を洗浄しました。軍人が多くやってくる土曜、日曜には洗っている時間がなくて、夜に一度だけやっと洗いました。慰安所の建物の外

＊4　コンドームのこと。日本軍将兵の性病防止（による戦力低下）のためである。

＊5　性病治療として六〇六号とよばれたサルバルサン注射を打ったが、金福童さんの証言から性病予防としても使ったことが窺える。

には風呂があり、夜入りました。私は性病にかかったことは一度もありませんでしたが、裂けた傷の手当てを度々してもらいました。生理帯はガーゼのものを配られ、一度使用すると捨てました。軍人の多くは血が嫌いで、生理の時は軍人を受けませんでした。生理の時、管理人が戸の前に赤いしるしを貼って休ませました。それで生理になると休めるため、私たちは喜びました。うっかり軍人の相手をしていて、血が出て汚してしまうと、怒った軍人から横っ面を殴られました。

●香港とシンガポール、インドネシアを転々として

ある日、朝に軍人たちがトラックを持って来て、何の説明もなしに荷をまとめ、のるようにと言いました。トラックにのって行き、軍隊の貨物船にのりかえ到着したところが香港[◆6]でした。私たちは香港でも広東にいた時と同じように、軍人たちが個人の広い屋敷を取り上げて合板で間仕切りをしてこしらえた慰安所の建物に入りました。軍部隊からは離れた場所だったのですが、周囲には家がまばらでした。その家には誰も住んでおらず、洋服タンスに服がそのまま残っていて、その他の生活用具もそのままありました。服装店は服を吊るしたまま開いていて、管理人が私たちに気に入った服を持ちかえるようにと言いました。韓国から一緒に行った日本人と朝鮮人が、ひきつづき私たちを連れて歩きました。訪れて来る軍人たちは変わりました。お使いをしてくれる人も香港人になりました。その後、場所が変わる度、使いをする人は現地人に変わりました。香港に約三カ月いて、また移動することになりました。

シンガポール[◆7]でした。軍人たちの後に従っていたようです。軍部隊からは少し離れていて、民家からは遠く離れた場所でした。三階建洋館を四軒、鉄格子で窓をふさぎ、入口には歩哨が見張っていました。以前にいたところと同じような環境です。慰安所は、細長く建てられた家に間仕切り布を垂らしただけです。軍人たちがトラックでやって来て門前に降りると、それぞれ散らばり慰安所に入りました。慰安所の建物から遠くの大砲の音がよく聞こえました。非常に暑かったことを憶えています。

時々、山深いところにある軍部隊まで出張もしました。[*8] 軍人たちが護衛して、一〇人そこらの慰安婦が一緒に出かけました。移動する際は、ずっと幌を降ろしたままのトラックにのって行ったので、外をながめることは出来ません。テント一つで持運びの慰安所をつくり、テントの中を合板で間仕切りして、三、四人ずつ入れるようにします。慰安所の責任者はその部隊に別にいました。軍人たちがあまり大勢押し寄せたので、みんなせわしなくズボンを降ろすだけで用をすませ、腰ひもを結びながら外へ出ると、次の人がすかさず入って来ました。私たちははじめから脚をカエルのように曲げ、両側にひろげてやや斜めになった姿勢で、寝台に座ったり、寝たりして、そのまま一日中軍人たちの相手をしました。夜になると、脚をまっすぐに出来ないほどになりました。一週間はこうして過し、慰安所に帰るのでした。こうしてまた打ち明けていると、ほんとうに胸が痛くなります。

◆6　日本の香港攻撃は、一九四一年一二月に始まった。
◆7　日本のシンガポール占領は、一九四二年二月であった。
＊8　「慰安婦」のなかには「部隊付き」にされることもあった。軍からの要請で慰安所業者が指定人数をさしだし、女たちはその部隊とともに銃弾飛び交う危険な戦場にまで行かされ、性交を強要された。上巻の宋神道さんの証言参照。

シンガポールで数カ月間暮らし、スマトラへ、インドネシアへ、マレーシアへ、ジャワへ、私たちは移動しました。船やトラックにのって一日中、あるいは数日かかって行きます。ある時はトラックで行く途中で、トラックが大きく揺れた拍子に、私はひどくぶつけました。お尻におできができて数カ月間苦しみました。最後にいたところはまたもシンガポールでした。

私はどこにいても特別好きになった人はいません。顔馴染みになる頃には他の場所に移動したため、思いを寄せるひまもなかったのですが、そんな心の余裕もありませんでした。休み時間になりさえすれば、車座になって泣いてばかり。日本が勝てば家に帰れるという思いで、日本が戦勝するように祈りました。

他にも慰安所はたくさんありましたが、一カ所に集めないで、至る所に分散して設置したという話を耳にしました。慰安所は「クラブ（倶楽部）」と呼ばれ、それぞれ違う名前がついていて、私がいた慰安所は「コア倶楽部」という名前でした。最初、広東から行く先々で「コア倶楽部」という札が玄関前に貼ってありました。香港から中国人の女が一人と日本人の女が数人一緒に歩きまわるようになりました。この女たちは私たちよりも年上でした。日本人の女たちとは口をきくこともなく、私たちは自分たちだけで交わっていました。

慰安婦だった頃、私の名前は「カネムラ・フユコ」であったり、「ヨシコ」であったりでした。どれも軍人がつけたものです。新しく移動したところで新しい女たちが増えましたが、この頃、彼女たちの中に私と同じ名前の人がいると、新しい名前に変えてくれました。「カネムラ・フユコ」を一番ながく使いました。

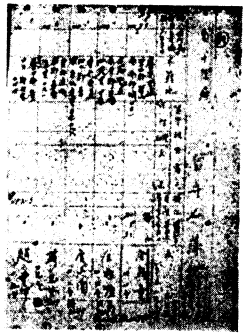
管理人は最初から一緒に歩きまわった、日本で育った四〇代の韓国人でしたが、この人を「ニイサン（兄さん）」と呼びました。彼は気に入った「慰安婦」を選んでは連れ込んで寝たりしてましたが、「慰安婦」が従わないとひどく殴ったり叱ったりしました。慰安所ではいつも日本語を使っていました。

●陸軍病院で血まで取られて

ある日から、ぱたりと慰安所に軍人がやって来なくなりました。私たちは管理人の韓国人に食事をつくってあげながら慰安所にそのままいました。二週間ぐらい過ぎたある日、日本軍人たちは赤い十字の描かれた車に乗って慰安所にやって来ると、私たちを乗せて行きました。この時、韓国人の管理人はどこかへ逃げ出しました。車に乗ってみると車内にもいません。そのままどこかに隠れてしまったようです。その時まで、私たちは解放された［日本敗戦による朝鮮解放のこと］ことも知らなかったのです。知っていたら、そいつを殺していたでしょう。

日本軍人たちが連れて行ったのは、シンガポールにある第一〇陸軍病院でした。すでに同じような女たち約三百人が来ていました。日本軍人たちは私たちに看護訓練をさせました。[*9] カボチャを置いて、人間の身体と思って注射を打ってみなさいと教えたり、病院の掃除もさせました。それで今でも私は血管注射を上手に打つことが出来ます。また病院では、全員に血液検査を受けさせた後、どうかして血液が不足すると、患者のために血を採血するのです。採血されると耳鳴りがしてめまいがします。すると、軍人がブドウ糖注射を一本うってくれました。

ある日、誰かが私を訪ねて来たと言われ、行ってみると一人の朝鮮人の男が近づき、自分はヒョン



ブにあたる者ですと言いました。私たちは互いに初めて見る相手でしたが、血がそうさせたのか、互いに抱き合い大声で泣きだしました。彼はヒョンブ（母方の従姉の夫）、つまり叔母の娘婿でした。彼は釜山で漁船をもっていたのですが、徴発され自身は軍属で南洋に行くことになったそうです。母は台湾からの私の手紙を見てまだ私が台湾にいると思い、ヒョンブに私の写真を見せながら、台湾に行き必ず私を訪ね、連れ出して来るように頼んだようです。ヒョンブが結婚した時、すでに私は家を出ていたので、彼と私は互いに初めて顔を見たのでした。シンガポールで解放を迎えた彼は、朝鮮人の女がいるという場所はすべて訪ねて歩きながら、聞いて聞いてついに第一〇陸軍病院まで来たのでした。彼は米軍収容所に収容中でした。ここから出て収容所に行こうと言いました。先日、日本へ行った時、大阪博物館で「日本の看護婦」という説明のついた写真で、看護婦の服を着た私を発見したのだそうです。

ヒョンブが病院に対して、私を収容所に連れて行きたいと申し出ると、最初は駄目だと言われました。彼が行ったり来たりして交渉をすると、病院にいた三百人の朝鮮人の女たちも全員行けることになりました。韓国人がものすごく背の高い大きな米軍トラックを運んで来て、女たち全員をのせて米軍収容所に行きました。収容所に到着すると、太極バッジをそれぞれに一つずつくれました。一人の

男は小麦粉とトウモロコシの粉でつくった粥を分けてくれました。粥はあまりきれいではなく、小さな虫がまざっていることもありましたが、蜂蜜の味のようだと言いながら美味しく食べました。収容所には黒人もいて、中国人、ヨーロッパ人を合わせると千人はいたようです。日本名は使えなくなり、朝は愛国歌をうたい、韓国語だけを使いました。日本語を使うと五〇銭ずつ払わなくてはなりません。その時、はじめて米国の軍人を見ました。米軍は私たちの生活には干渉しませんでした。何事も韓国人が自治的に行ないました。収容所には男、女がそれぞれ間仕切りされた場所に分けられて収容されていましたが、会いたい人がいれば、いつでも面会出来ました。それで、私はヒョンブにしょっちゅう会えたのです。そこの住民たちが収容所の周辺に来て食物を売りました。衣類を食物と交換して食べました。時々、米軍が持物を調べました。

＊9　日本敗戦直後の一九四五年八月三一日、当時一九歳だった金福童さんが南方軍第一〇陸軍病院の軍属の中で最も低い職級にあたる「傭人」として採用されたと記された「第一六軍司令部同直轄部隊朝鮮人留守名簿第四課南方班」（一九四七年九月作成）が発見された。（写真参照。二枚目の写真には「金福童」（太線部分）とでている）。韓国挺身隊研究所の姜貞淑氏が二〇〇五年一月に発表したもので、姜氏は「戦争が終わった時点で朝鮮人女性を看護婦として雇ったことは日本軍の慰安婦制度を隠蔽、または最後まで朝鮮の女性労働力を収奪しようとした日帝の意図と解釈することができる」、また「軍属名簿には金さん以外にも二九九人の朝鮮人女性の名前が残っており、国に慰安婦被害者として登録していない実際の被害女性がかなり多数いるものと見られる」と述べた（『朝鮮日報』二〇〇五年一月一一日付）。この資料は、金福童さんの証言の信頼性を裏付けていると言えよう。

なお陸軍第一〇病院は敗戦時にはスマトラにあったが、引揚にあたってシンガポールに移動してきていたと思われる。「慰安婦」を軍病院の看護婦にしたことについては、本書［資料紹介］（一五六頁）参照。

ある日、船がきたからと、荷物をさげ半日歩いて行きましたが、船は来なかったとわかり、また引き返しました。そんなことを何回かくりかえすうちに、ほんとうに船が来ました。大きな船でした。小舟にのって出てその船に乗船しました。三百人はのれる船です。最後の帰国船だったそうです。朝鮮人だけをのせて、途中で何度も止まり人々をのせながら、何カ月もかかって釜山に到着しました。

釜山に着いても半月ぐらいは船の中に閉じこめられたまま出られませんでした。コレラが広まったためだそうです。ある日、ヒョンブが手紙を書いて空缶に結んで、通りすぎるポンポン船に下ろして送ってもらいました。彼はその周辺でかなり長く船の仕事をしていたため、そのポンポン船の乗務員が事情を知って、手紙を彼の家に伝えてくれました。

四日ほど過ぎると、従兄、従姉たちが船にのってやって来ました。毎日、甲板に出て外をながめていた私たちが彼らを見つけました。船が離れていたので声はよく聞き取れず、お互いに身振り手振りをしては泣き叫んで大騒ぎでした。次の日、コチュジャン（唐辛子味噌）、キムチなどがヒモに括られて昇ってきました。翌日はもっと大きな篭が昇ってきました。

梁山に連絡したので、母もやってきて待っていました。数日過ぎると、船から全員降り消毒薬をふりかけられ、倉庫らしいところに入りました。ヒョンブの弟が解放後に警察官になっていて、ヒョンブと私をまずはじめに引き出してくれたのです。倉庫から出ると一人ずつ持ち物検査を受けました。お金は所持しているすべてを出すように言われました。軍人から少しずつもらったものや病院でもらった分で、お金と軍票がわずかばかりあったので全部差し出しました。韓国では使えないので惜しいとは思いませんでした。代わりに百円のお金とムルクムまで行く汽車の切符をくれました。

扉を出ると母が豆腐を手にして、食べるように言いました。顔が変わってしまってお互いにわからないほどでした。母と私は抱き合い大声で泣きました。一五歳で家を出てから二〇歳になった年に帰ってきたのですから、五年ぶりになります。翌日、母と私は梁山にむかいました。ヒョンブは、私が慰安婦生活をしていたことを知っていたようでしたが、母には言いませんでした。病院で看護婦をしていたとだけ話したそうです。

●母の願いだからと哀願されて結婚

家に帰ってみると身体が腫れて痛みました。母は私がいなかった六年間、いつも夜明けに娘が戻るようお祈りしていたと言います。そのお陰で帰れたけれど、身体の具合がお話にならないくらい悪いのでした。梁山の通度寺の庵子である春秋院で一年間療養しました。薬をもらって飲みながら静養すると、健康があるていど快復しました。家にまた戻ると、母は嫁に行かなくてはと気を揉むのでした。仕方なく私が慰安婦生活を送ったことを打ち明けると、母は嘆き悲しみました。その時、心臓を患ってずっと苦しみつづけて亡くなりました。母は、後妻でもいいから嫁に行けと言っていました。いい話があるからと、一人で生きて行けるものではないと、そして母自身の願いでもあり、母が安らかにあの世に行くためだと、親がしっかりしていないからおまえがこんなに苦労してしまったのだと、娘の私に哀願するのでした。

それで結婚することにしました。八歳年上の相手でした。結婚して暮らしてみると、子どもも生めず、夫はひっきりなしに浮気をしてとても一緒には暮らせそうもありません。その人とは四年ほど暮

らして別れました。また母と暮らしはじめました。母は梁山に田圃を五マジギ［田畑の面積の単位で、一斗分の種をまくほどの広さ］、畑を三、四マジギ所有していましたが、これらを私にくれました。またもや釜山出身の、運転手をしていて離婚した人を紹介され一緒に暮らしはじめました。二人で梁山の土地を全部売り払い、釜山に出て事業をはじめたのですが、つぶれてしまいました。夫は死んで母も亡くなりました。

私は一人で小さな雑貨屋をして暮らしました。隣人と助け合い、近所の人たちとうまく付き合って楽しく過ごしました。そのうちに店は撤去されることになり、アパートをあてがわれたのです。アパートを手に入れようとお金をつぎ込み、店を維持できなくなりました。それで野菜畑で働いて、一日約三万ウォンもらいました。[*10]

ある日、テレビに金文淑氏が出て、挺身隊の申告をするようにと話していました。秘密は守るからと、電話番号を教えてくれました。電話をかけるとすぐに来るように言われ、行ってみると、心配しないで、きっと補償がでるでしょうと言うのです。

申告する前に姉に相談しますと、姪たちもいるのだからと厳しく止められました。数日間悩みつづけ電話をかけたのでした。一九九二年一月一七日のことです。姉はそれ以来、私とは縁を切りました。いつか日本に行った時のことがテレビに映り、甥や姪たち（叔父の孫たち）にまで知られてしまったのです。彼らも私を訪ねて来ません。私には子どもがないので、父の祭祀を執り行ってくれる甥や姪たちです。申告してから私は、いっそう心細い思いで暮らしているのです。

（整理：鄭鎮星／翻訳：従軍慰安婦問題ウリヨソンネットワーク／注：金富子／出典『証言集Ⅱ』）

＊10　釜山に暮らしながら挺身隊問題対策釜山協議会などを創立し、元「慰安婦」被害者の「申告窓口」を設けるなど、解決のための活動を行っている。

《整理者の追記》

研究会でハルモニたちの証言を採録するという困難な作業をすすめている間に、私が金福童ハルモニの証言を整理することになったのは幸運だった。ハルモニと数日間一緒にすごす機会ができたし、その上ハルモニの記憶力は驚くほど鮮明だったからだ。

一九九三年六月、私は金福童ハルモニとウィーンで催された国連人権大会に行くことになった。私たちは米国の女性団体が主催する女性人権フォーラムで発表し、またフィリピンの団体と一緒に、軍「慰安婦」問題を主題にしたフォーラムを組織した。慌ただしい日程の合間を利用して、私はハルモニをしつこく追いまわし、ハルモニの記憶を蘇らせることに努めた。ハルモニの記憶は非常に鮮明で、話は理路整然としていた。そのため混乱に陥らずに一貫して整理できたばかりでなく、その当時の状況をとても身近に感じることできた。とても細かな部分まで詳細に冷静に描いてくれながらも、感情の昂ぶりすら見せなかった。奥地の軍部隊に出張慰安に出かけ、脚を開く間もないほど絶え間なく軍人たちを受け入れた話を、ハルモニがもの静かに語っていた時、かえって私が胸の塞がる思いであった。長い歳月、荒波を踏みこえてきて、感情を落ち着かせる術を彼女なりに会得したようである。

過去を打ち明けた後、親しかった親戚との行き来は断たれ、淋しい思いもしたが、彼らのために出来るだけ姿を見せないように気を使ってきた。しかし、最近ナヌムの家に居住を移し、「これからは私に出来ることがあればやるつもり」と言う。ハルモニに、暖かい気持ちをいつも伝えたいと思う。

（鄭鎮星）